



## 犬と話すにはどうしたらいいですか

ぼくはラッキーがだいすきです。ぼくはラッキーとおしゃべりしたいです。どうしたらはなせるようになりますか。



札幌学院大学人文学部教授

**森 直久** (もり なおひさ)

ラッキーって何？ あ、ペットの犬ですか。今回は子ども電話相談室のようですね。むずかしいことをいうかもしれないけど、わからなかったら、おとなのひとにきいてくださいね。

人間を含む動物の内的状態を知るには、行動(人間なら言葉を含みます)を手がかりにするしかありません。「快・不快」「恐怖」といった割と基本的な情動は、行動にストレートに表れると思います。からだが震えるとか、うなり声をあげるとか。これは犬も人間も変わりませんね。このレベルであれば、犬の内的状態はわかると思います。ただ空腹のとき、人間ならば「おなかすいた」と言いますが、犬は基本的に、ある種の鳴き声を立てるだけです。よって、動物の行動を文脈に位置づけ、「腹が空いているのだな」と判断するのは人間の役目です。まあ、いつもエサを盛りつけている皿を持ってくるようにさせるとか、「腹が減っている」時に特有の表現をするように学習させることは可能かもしれません。レスポンド条件づけ、オペラント条件づけという技法が心理学にはあります。

人間同士の会話は、さらに高次のレベルで生じることが多いです。同じ内的状態にあるとき、それに適合する表現と適合しない表現を、場合によって選択することが、人間にはあります。要するに「嘘をつくとか」「婉曲な表現をする」とかいわれる事態です。本当は空腹なのに、腹が減っていないという表現をすとか、好意を持っているのに敵対的な行動をすとか。人間ではご存知のように、よくあることです。きみも好きなおんなのこにいじわるしちゃうことあるよね。しかし犬ではどうでしょう。「飼い主さ

んがダイエットしているのに、飯をくれとは言えねえ」という忠犬とか、「飼い主さんは好きだけど、ここはちょっとじらして、しっぽふらないわよ」というツンデレ犬とか、実際に見たことがありますか。内的状態の知覚とその表現が比較的独立していれば、こういうことは可能ですが、これは多分、言語を有していることが必須に思われます。言語の一つの機能は、不在のものをあらしめることです。選択肢を想定するというのは、起こりうる可能性(したがって現実には生じていない出来事)を言葉のうえで存在させる行為です。よって「本来こうしてもよいが、違うことをする」という嘘や婉曲表現が可能になるのです。

あなたは犬とおしゃべりしたいとおっしゃいますが、どこのレベルまで通じ合いたいですか。犬とは基本的な情動レベルまでしか通じ合えないから、かえってよいのかもしれないよ。愚痴を言っても、泣き言を言っても、大好きな飼い主さんが側に来てくれれば「快」反応ししない。あなたを全面的に肯定的に受容してくれる、臨床心理学的には最良の聞き手ですね。これで犬が「また愚痴言っちゃがる。情けねえの。でもエサくれなくなっても困るからおべっか使っとこ」なんて考え得る存在だったらどうでしょう。動物との会話を仲介してくれる黄色い妖精さんがいるようですが、出会わないほうがいいでしょうね。深くわかり合えないから幸せ、ということもあるのかもしれない。



### Profile — 森 直久

札幌学院大学人文学部教授。専門は認知心理学、社会心理学。主な著書は、『心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド』(共著、北大路書房)など。